町民文芸

只見短歌会　十一月詠草

大塚栄一　指導

竹林に凌霄花高く咲き祖母逝きし日は鮮やかなりき　小倉キミ子

来る春に植ゑるかなどは分からねど地を確かめてダリヤの根を掘る　馬場　八智

山茶花の耀ふ花を荒縄で囲ふ庭師は手元休めず　古川　英子

旅先のホテルで赤子を見てくれし人同郷と嫁の声はずむ　新国由紀子

大根を積みて股ある大根を恵比寿様への供物と洗ふ　渡部ゆき子

老人となりし自覚を待ちをれど若き頃よりの気持変はらじ　関谷登美子

工事場の近き家々に責任者か終りを告げる挨拶に来し　目黒　富子

み仏の姿に似れば捨て難く墓の傍へにその石を置く　五十嵐夏美

一つひとつ行事が終わり気がつけば庭の落葉に驚き拾ふ　渡部ヨリ子

いくつもの曲の入りし玩具もち一歳の曾孫嬉々として押す　新国　洋子

（出詠順）

只見俳句会　十二月例会

目黒十一　指導

尾根向き浅草岳や大根引く　敦子

ひつじ田や消雪工事の音響く　吉児

会津富士耀（かがよ）う峰や初茜　邦男

類を見ぬ茅葺き屋根の初駅（うまや）　信

空もよしお婆出てみろ大根引　洋子

水涸るる川原小石のみな丸く　順子

冬支度風の早さに間に合わず　修一

初雪や肩をすぼめて早足に　リウコ

来春の畑に働くモンペ縫う　一穂

初雪の池の波紋に水澄めり　都

干し柿や愛はベタベタせぬほうが　礼

鉛色の漬菜厨は凍て深々

晴天や聳（そび）ゆる雪の浅草岳

馬宿と染屋と障子明りかな

門灯へ低く匂いり冬すみれ

マネキンの毛皮に触れてみたりけり

引抜きし葱の白さや日の昇る

最上川流れ逆撫で北風（きたおろし）

病院へ着いてマスクを整へり

雪降る日ペットの傍に単行本

柿一つ初物だよと仏壇に

テーブルはおかわり続く新とろろ